『七年史』『京都守護職始末』に続き
東軍へのいわれなき曲解を
真実と圧倒的筆力で覆す不朽の史論！

維新前後の政争と小栗上野

蜷川　新［著］

正・続合本

限定三百部復刻

マツノ書店

序

昭和三年八月　男爵　山川健次郎

明治戊辰の年、旧幕臣小栗上野介の内室は誕生して久しからぬ一女児を伴ひ、予が親戚横山主税常盛が会津の第に寄寓せり、予横山家の人々の談により、内室が其の領地上野国権田の陣屋より避難し、新潟を経て会津へ来る迄、偏に辛苦を嘗めし状態を聞き、同情に堪へざりき、其の後小栗氏の虐殺、又其の人となりを知るに及び、小栗氏に対する同情益々深きを加ふ、小栗氏は徳川幕府の末造に於て、其の識見手腕天下に匹儔なかりしなり、其の廃藩置県を主張せるが如き、横須賀の造船所を創建せるが如き、識見手腕の一班を見る可く、共の他外交に経済に、其の国家に貢献せしもの甚だ多し、氏の捕へらるゝや、一回の訊問なく、河原に引き出だし、荒薦に座せしめ、縛首の刑に処せしと云ふ、是蓋し武士を遇するの道を知らざる徒輩の蛮行なりしなり、小栗氏の陣屋に武器多かりしを以て、彼等は小栗氏の罪過とせりと云ふ、武家に武器あるは猶商家に商品あるが如し、何ぞ是を以て罪とすべけんや、当時世人は小栗氏が強硬なる長州征伐論者なりしにより、是の奇禍に罹れりと云へり、予是の説の当否を知らず、友人蜷川博士小栗氏の伝を著し序文を予に徴む、交誼上辞す可からず、仍って所懐を述べて序文に代ふ。（本書正編より）

一昨年九月、余が「維新前後の政争と小栗上野の死」を公にするや、共鳴者の意外に多かりしと同時に、又小栗を賞め過ぎ、勝や西郷を貶し過ぐると忠告せられたる先輩もあり、又正論には相違なきも今日に至りて鳥羽伏見の事件の欺瞞的内情を素破抜くのは如何のものかと思ふなぞと注意せられた先輩もあつた。凡そ物には両面がある、余の著書が其人によりて賛否の判断の岐るのは必然の数である。余としては、日本国の歴史を正ふするのが目的であり、故更に小栗を賞揚し、徳川方を強いて弁護するのが本旨ではない。余は前著に於ては、余りに遠慮して史実を取扱ひしことを悔いたのであつた、遠慮は無益なるを覚へた、一層厳俊に史実に対し其研究を発表するを以て余の責任也と感じた、本書を後編として上梓するに至りしは、其の爲めである。

従来の維新前後の歴史は、政争に勝ちし側の人々に於てのみ書き又は書かしめたる片面史である。今人は此れに依って、当年の事を解せしめられ、之れに巻き込まれて居るのである。

本書続編「序」冒頭（以下略）

■昭和三年刊の「正編」と昭和六年刊の「続編」を合本し、B6判の原本をA5判に拡大復刻。どちらも大好評で版を重ねた本です。

■小栗史料としてはもちろん、昭和前期における珍しい東軍関係の読み物としても大いに価値あり。完売となった『小栗上野介正伝』をお買い漏らしのお方にもお奨め致します。

■装幀は好評だった『小栗上野介正伝』に準じ、また同書より二百頁多いのですが価格は据え置きます。

■体　裁　A5判上製函入　七一六頁
■予約特価　一万円（税・〒共）
■定　価　一万二千円（税・〒別）
■特価締切　25年11月30日厳守
■発　売　26年1月中旬
▼書店不卸　▼返本OK

限定三百部（番号入）

山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
URL http://www.matuno.com
マツノ書店

不朽の史論『維新前後の政争と小栗上野』（正続）

作家　中村彰彦

江戸時代に豊臣秀吉が全く評価されなかったのに似て、明治時代にはかつて幕府を支えた人々が賊徒の一言で片付けられてしまうという悪しき傾向があった。

これら史観とも言えない史観に抗して旧会津藩の立場をあきらかにしたのが北原雅長『七年史』（明治三十七年〈一九〇四〉）と男爵山川浩遺稿『京都守護職始末』（明治四十四年〈一九一一〉）であったことは、マツノ書店の出版活動の理解者ならばとうにご存知のことと思う。故なき誹謗を浴びるばかりだった旧幕府関係者の雪冤を目的とする史論は、明治も末になってようやく出版されはじめたのである。

さらに昭和三年（一九二八）は明治維新から数えて六十年目の戊辰の年であったため空前の幕末維新ブームとなり、東京日日新聞は『戊辰物語』を連載（のち岩波文庫）。その執筆メンバーの一人だった子母澤寛は、同年中に『新選組始末記』（のち中公文庫）も上梓した。

本書『維新前後の政争と小栗上野の死』正編が同年九月に刊行されたのも、出版界の右のようなブームに押されてのことであったかもしれない。ただし本書は決して〝便乗出版〟などではなく、著者蜷川新は歴史学者顔負けのひろい知識と圧倒的な筆力により、間違いなく幕府の名官僚のひとりであった小栗上野介忠順（ただまさ）の多岐にわたった業績を紹介して余すところがない。

小栗の業績としては、以下のようなことどもを挙げることが出来よう。万延元年（一八六〇）正月、初めての遣米使節団の正使新見（しんみ）正興、副使村垣範正に目付として同行したこと。文久二年（一八六二）六月には幕府陸軍の洋式軍制改革にあたったこと。元治元年（一八六四）八月から慶応元年（一八六五）二月にかけて勘定奉行、軍艦奉行を歴任し、フランス公使ロッシュと交渉して横須賀製鉄所の建設を決定したこと。

余談ながら日露戦争がおわってまもなく東郷平八郎・聯合艦隊司令長官が小栗家の遺族を訪問し、我々がバルチック艦隊を撃滅できたのは忠順氏が横須賀製鉄所を造っておいて下さったからだ、と礼を述べたという佳話があるのも忠順の慧眼のほどを良く示している。

慶応元年五月から勘定奉行に復したかれは、事実上の日本の蔵相として関税率の改定に成功。フランスとの間に六百万ドルの借款契約を結んだかと思えば、兵庫商社を設立したりもした。著者蜷川はこの人物を、

「国家として是非とも用ひられざる可（べか）らざる重要の能臣」

「幕府の為めに是非とも無くてはならぬ人物であったのである」

と高く評価しており、右に列挙した諸点を小栗忠順の功績とすることでは、『国史大辞典』も日本歴史学会編『明治維新人名辞典』も共通している。前者が参考文献として本書を、おなじく後者が本書と『続 維新前後の政争と小栗上野』を挙げているといえば、これらの二著が小栗忠順の雪冤と再評価を決定づけた不朽の史論であることがおわかりいただけよう。

もってこれらの二著をお勧めるるゆえんであるが、著者の「歴史学者顔負けのひろい知識」については続編から一例を引いておこう。

「江戸開城と勝西郷の所謂功績と真相」の項は、西郷が勝海舟の意見に共鳴して江戸総攻撃を中止したというのは俗説に過ぎず、事実はイギリス公使パークスの干渉によって攻撃を思い止まったのだと論じている、いわば西郷はその人間性から無血開城を志向したのではなく、パークスの外圧に屈して総攻撃を中止せざるを得なかったというのである。

蜷川新がそう論じて四十年以上たってから書かれた大佛次郎『天皇の世紀』の「江戸攻め」の章には、西郷に対するパークスの態度がより具体的に書かれている。パークスは、

「抗戦にも出ない徳川慶喜を官軍が過酷に処罰しようとしているのは、国際輿論に逆行するもので不都合だ」

と称して何らかの外交処置に出ようとしていた、というのだ。

このような点から見ても著者の歴史観には端倪すべからざるものが感じられるので、正編と続編にやや重複する記述があるのは承知の上でこれらの二著をおすすめしたい。

略目次

正編

前編 小栗上野の功業と冤死

一 小栗上野の外交上に於ける功蹟
① 安政條約交換使節の大任と米国人の賞讃 ②対州島に於ける露国の艦長に対する小栗の決死的談判
余録 ①小栗上野介とスタンフォード大学の教授 ②最初の遣米使節の写真に付て ③小栗上野介の米国土産
二 小栗上野の我が国の軍事上に於ける功蹟
三 国家財政及経済上に於ける功蹟
四 国内統一の秘策及郡県制施行の主張
五 小栗上野介と最後の江戸城大會議及小栗の薩長抹殺の作戦計画
六 〃 江戸を去り上州権田村に退く及暴徒の襲撃
七 〃 の反逆人としての冤罪及小栗父子の斬首と梟首
八 〃 の母堂と夫人の辛うじての避難並に其悲劇
九 〃 の家筋と其履歴
十 〃 と當時の名士の対照
十一 〃 の人物と性格
十二 銅像建設、横須賀海軍工廠の小栗の功蹟に関する国家的公正なる声明、御内帑金の下賜

後編 維新前後の政争と自由批判
一 維新と其前後との区別
二 鎖国攘夷論の危険性
三 維新前後、薩藩の権謀術策
四 維新後江戸及関東に於ける強盗放火と其の背後の人西郷
五 慶応三年十二月九日の所謂小御所会議と山内容堂の正論、岩倉及西郷の権謀
六 鳥羽伏見の変と開戦の責任者たる薩長
七 江戸城引渡の真相と英公使パークスの干渉
八 徳川方脱走者の飛檄
九 東北二十余藩奮起と輪王寺宮の令旨
十 会津藩の忠誠と其正当防衛
附・旧会津藩出身某先輩の会津開城に付ての弁明
十一 維新以後の内乱と国民の犠牲

続編

一 日本国史上より観る維新
二 慶応の維新
三 「慶応」は何時「明治」と改められし乎
四 事実と事理無視の幕末史論
五 慶喜西京を走り大阪に至る折の上奏文
六 薩長土肥四藩主の藩籍奉還の建白書と其内容検討
七 公卿の攘夷論と其の世界事情の不知
八 攘夷論者は天下を欺ける乎
九 維新後の崇夷外交への激変
一〇 雲井龍雄の諸藩に飛せる檄文
一一 討幕論者の真の目的は果して何なりし哉
一二 ペルリ来航時代の古き文献
一三 ペルリ渡来に関し徳富氏の幕府嘲罵と其の不明
一四 薩藩々論の統一は維新既に成れる後の事実
一五 幕政下の社会組織と史家の盲断
一六 徳富氏の勝海舟礼賛を読みての所感
一七 近藤勇の甲州出陣と勝海舟の共謀
一八 会津武士の思出の記と勝海舟の卑怯
一九 江戸開城と勝西郷の所謂功績と真相
二〇 山岡自身の述べたる西郷と山岡の談判
二一 二本松藩侯夫人の避難実記
二二 岩瀬肥後守の人物と事業
二三 幕府倒滅の理由に関する徳富氏の評論
二四 横浜開港の恩人水野筑後守と其記録
二五 江戸城降服と川路左衛門尉の武士道自害
二六 井伊大老の勇断と其の合理性
二七 水野筑後守の国政改革意見
二八 水野筑後守と佐賀鍋島侯との応接
二九 水野筑後守の拓殖政策
三〇 小栗上野介と米国
三一 〃 の崇りを怖れたる村民
三二 〃 の財産と掠奪
三三 最後の江戸城会議と小栗上野介の武士的態度
三四 露艦の対馬占領と小栗上野介の心事
三五 小栗上野介後年の書面と幕府の史実
三六 〃 の外国語の能力
三七 幕末江戸市内の不穏と小栗上野の硬論
三八 小栗上野介の権田村に斬らるゝ折
三九 小栗父子の墓所及老女の自害共他の事実
四〇 小栗上野介と剣道の極意
四一 〃 の容貌風采人物
四二 〃 に関する今人の見解
①小栗の死と其の国民的反響 ②史家花見朔己氏の論評 ③福原虎雄氏の小栗の死に対する批評 ④野田寛氏の小栗の死に関する私信 ⑤中里介山氏の小栗に関する論評 ⑥中村修二氏の小栗の死に対する論評 ⑦吉田絃二郎氏の小栗と魯艦問題
四三 小栗上野の死に封する諸名士の書簡 ①渡邊修二郎 ②江木翼 ③三上参次 ④倉富法学 ⑤小笠原長生 ⑥柴五郎 ⑦畑陸軍大將 ⑧米山梅吉 ⑨篠田法学博士 ⑩中村政太郎 ⑪石井孝一 ⑫佐野朝男 ⑬花見朔己 ⑭岡田良平 ⑮大隈熊子夫人 ⑯権田村長市川元吉
四四 中村孝也博士の小栗上州論と之れに対する余の批判
四五 藤巻東郊氏の「蜷川博士と小栗上野の死」
四六 狼巌山人の「幕末の政争と小栗上野」
四七 降服の犠牲となれる旗本八萬騎以下無数の江戸人
四八 江戸全市八萬旗本屋敷の没収

（以下略）

官軍意識との戦い

東善寺住職　村上泰賢

官軍という言葉がある。「官」の反対語は「民」であるのに、どうしたことか「官軍」の反対語が「民軍」にならず「賊軍」となる。世の中はそれほど単純なものではあるまい。こうなると「官軍」はよろしくない決めつけ言葉となるから、私は使わないようにしている。

小栗上野介は幕府解散で勘定奉行はじめ陸軍奉行などの兼職も一切解かれたので、幕府から帰農隠棲の許可を得て家族と共に知行地の上州権田村に移り、東善寺に仮住まいした。ところが居宅を造り始めて二ヶ月後、やってきた西軍によって養嗣子又一及び家臣六名とともに殺されてしまった。

いま、小栗が斬首された水沼河原（高崎市倉渕町）に、「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」と彫られた顕彰慰霊碑が立ち、終焉の地であることを示している。この碑文の揮毫者が本書の著者であり小栗道子夫人の妹はつ子が母の蜷川新（にながわあらた）である。

石碑は、斬首された河原（本書のグラビアページ参照）を守って草刈りを続けてきた一村民の「このままでは小栗様が殺された場所がわからなくなって忘れられてしまうから、石碑でも建てて…」という訴えを契機として、旧倉田村・烏渕（うぶち）村の両村民有志が建立計画を起こし、蜷川に碑文の揮毫を依頼した。蜷川は前記碑文と、もう一枚「幕末の偉人　小栗上野終焉地」と計二枚を書いて届け、村人に選択を委ねた。村人は協議の末、こちらが本当、と前者を選んで彫った。このような散文体の記念碑は珍しいといわれる。

さて、戦前はこういった建碑はすべて内務省に届け出ることになっていた。表現の制限がここまで及んでいた時代である。所轄の高崎警察署に届けると、署長から「碑文に『罪なくして…斬らる』とあるが小栗を斬ったのは官軍だ。官軍は天皇様の軍隊だから罪のない者を斬るはずがない。穏やかでないから何とかしろ」とクレームがついた。別の碑文に彫り直せ、という強権指導である。

困った建設委員長市川元吉は、その窮状を蜷川に報告して対処を相談した。すると蜷川から「田中義一（総理大臣）に話をさせるから、待っていなさい」と返信があった。国際法学者として活躍する蜷川は、田中義一から国際問題に関して諮問を受け、助言をする立場にあった。間もなく署長のクレームは沙汰止みとなり、昭和七年五月に除幕式にこぎつけた。もう一枚は高崎市役所倉渕支所に額装で今も掲示されている。

署長が口にした「官軍が罪のない者を斬るはずがない」という認識と、明治新政府の対極にいた人物は逆賊、賊軍とする意識は、この署長のみならず明治以後の官僚、軍人、そして多くの国民が抱いていた通念であろう。民主主義の反対だから官主主義と名づけていい官軍意識である。

しかし、世界中の軍隊で「何をしても正しい軍隊」が存在したことがかつてあったろうか。昭和二〇年の敗戦でこの官軍意識は払拭されたはずであったが、じつはいまだにこの国にはびこっていて、たとえば福島の原発事故も官主主義で進めてきたことの破綻とみられる。

蜷川は国際法学者としての視点で、幕末明治の政争と明治新政府の汚点とも言うべき小栗主従殺害の理不尽を本書で鋭く指摘し、今では所在が不明な貴重な古文書を駆使して小栗の業績と悲惨な末路を確認することに力を注ぐ。そして時に薩長政府を攻撃する言葉が激越なものとなるのは、上野介の義理の甥という身内の視点が入ることもあろうが、文中に「官軍」の語を普通に用いているように、当時の通念を無意識のうちに受け入れてしまっているジレンマからであろうか。

遠慮会釈なく痛烈に攘夷派や薩長政府の矛盾を攻撃する内容に「こんな怖い本は出せません」と幾つもの出版社から断られたすえ、説得して昭和三年に本書の刊行にこぎつけるとたちまち売り切れ、わずか二週間に四版を重ね、三年後に「続」までも出版するベストセラーとなった。

明治二年、村人は館林に運ばれ首実検後に埋められていた小栗父子の首級を盗掘して遺体に戻し、明治政府の管理下のものを盗んだのだから永いこと（昭和三十年代後半まで）これを秘していた。これも官軍意識との戦いといえなくもない。

（高崎市倉渕町権田）

内容見本
（原寸大）

小栗の作戰計畫に驚歎したる大村益次郎

小栗上野介が主張したる東上せる薩長軍要擊の軍略は、何人が考へても、必勝的のものであり、若しも之れが行はれたならば、薩長人の天下取は一朝にして夢と消へ、日本國は小栗の兼ての考察によりて、直ちに郡縣制となり、天皇の御親政の下に、世界の大勢に適應する昭代の輝きたりしことは、蓋し疑は有り得まい。其れだけに彼れ小栗は、薩長公卿等より畏怖せられて、罪もなきに無理無體に斬殺せられたのであつたが、彼の作戰計畫に關して、長藩の大村益次郎が、上野彰義隊の戰爭の濟みし後に、同輩どもに物語つた左の事實を以て見ても、其の如何に確實の案なりしかと云ふことが分るのである。此の事實は菴原鉚次郎及木村知治の共著「土方伯」第三百九十八頁より第四百二頁迄に記されてある（此書は特に土方伯の爲めに編めるものであり土方伯の承認したりしものである）。

江藤新平が當時之れを聞きて、小栗が其妙案の卽時斷行を爲さゞりしを迂濶なりと誹りしは、流石に敏捷なる人の意見として、面白い點ではあるけれども、小栗は將軍自身では

又東山道の方面は木曾路を塞いで悉く官軍を江戸に入れ置いて戰へば、鏖殺にして終ふことは容易である。然して軍艦の一半を以つて駿河を扼し、他の一半を以て擣海を衝く。さすれば關東の諸侯は大抵德川家の味方になるであらう。此度の事を關ケ原の役と見れば、關西にも譜代大名もあれば親藩もある。又外樣大名の中でも幕府に志を寄せて居るものも絕無ではない。依つて此擧を以て德川家恢復の途も立つであらうからと云ふことで、其日の評議が一決し、小栗豐後守の策略に依つて實行することになつて、一同下城して終つた。所が夜が明くると、僅々一夜の內に其議が反覆して仕舞ひ、小栗派竝に是れに加擔したものは、遂に役儀まで免ぜられて仕舞つたが、如何にも敵ながら氣の毒な次第であつたと云ふと、此聲に應じて、江藤が云ふには、小栗はさう云ふ間拔けだからいかぬと云ふ、何にが間拔けだと反駁する、其所で江藤が云ふには、議論が一決したからと云つて下城して安々寢る樣な間拔けだから、反覆されるのも當然のことである。この危急存亡の場合に、呑氣な考へを持つてはいかぬ。議が一決したならば、其所で直ちに部署を定め、誰は何の兵隊を以て、何方に當れと云ふ

部署を定めてしまつて、直ぐそれを發表せねばならぬ。夫れをボンヤリ歸つて安閑と寢るといふやうな間拔けでは、到底出來やう筈がない、と云つたので、中々話が面白かつたと云ふことであり、江藤のこの話を聞いたものは、皆一同に江藤の機敏に感じたと云ふことである」

此の史實は國民に何を談るや

薩長方の唯一の軍略家であつた大村は流石に偉い所があり、公正に見て敵乍ら小栗の作戰計畫には驚歎したのであつた。「小栗は大村に勝る」と識者の評あるは、之れにても判明する。若し小栗の言にして、慶喜の用ゆる所となつたならば如何であつたらう。

一德川慶喜としても、薩長人に降服するの屈辱なく、一德川慶喜としても維新の大功臣たる名譽を完ふして「大政奉還」の終を美事に結ぶを得たのであり、又世界の大勢上不必要なりし封建の制度は、小栗の持論の如くに、直ちに廢止せられて、明治四年の後までも、日本に時代遲れの封建制度が存續することなく、日本國民は、慶應四年の初めより、

内容見本
（70%縮小）

早く世界の大勢に順應し、早く文化に浴し、早く郡縣制の恩代を樂しみ得たであらう。王政復古の回天的大業は、慶喜の大政奉還を以て前年十月十四日を以て、既に完全に成つたのである、慶應四年に至り、故更に亂を挑發したりし薩長の勝ちし爲めに「王政復古」初めて生じたのでは斷じてないのであること、之れ明白の事實なるが故に、小栗の意見にして用ひられしならば、國家の爲めにも、國民の爲めにも、稗益甚大なりしは蓋し云ふ迄もなかるべし。

又若し小栗の言用ひられしならば、之れが爲めに、東北の悲慘なる內亂も起らず、之れが爲めに、國民の五十年に亙りて非難し怨嗟したる「薩閥政府」も生ずることなく、之れが爲めに、佐賀の亂や萩の亂や、西鄕の起せる內亂も全く生ずることなかりしこと明白の理である。小栗一人の死と生との爲めに、此の重大なる結果の成否が生じたのであつたと云へる。薩長を本位となすものより見れば、小栗の意見行はれざりしは薩長の天下を作るが爲めに何よりの好都合であつたりしが故に、小栗の意見用ひられざりしを歡喜祝賀し、却つて勝等の薩長の爲めに都合好かりし軟論を賞揚し、色々と自分勝手の理屈も附けるの

であらうけれども、今日の時代より冷靜に六十年前を判斷し、何れが日本國民文化の爲めに、擇まる可きものなりしかを考慮することも、亦興味ある問題である。

小栗上野介と西鄕吉之助

勝と西鄕とを幕末の二大人物として、比較する人は由來好くある。勝自身も亦「當時の英雄は勝と西鄕とのみ」と云つた風の態度を世人に示したものであり、大いに西鄕を賞めそやし、古今無雙の英雄也と謳歌し、之れと共に、自己の價値を高めんと努めたこと歷々である。併し乍ら、三宅博士の公評せるが如く小栗は勝に優る人物である。然らば、小栗と西鄕とを對比するのは、又面白き對照でなければならぬ。

小栗は反逆人として官軍に斬殺せられた。西鄕は反逆人として官軍の彈丸に斃れた。前者には反逆人たる何等の證跡なかりしも、後者には立派に反逆人たる擧兵があつた。然かも後者は死後神として祭られ、前者は永遠に反逆者として寒村に葬られつゝある。是れ實に勝者と敗者との差違であるのを見て、人生に疑生し、人事に悲哀の念なきを得まい。